

動物に見る子育てのヒント

中川志郎*

Some Hints on Maternal-infant Bonding from Observing Zoo Animal Nursing Behavior

*Shiro Nakagawa

*President, Japan Society for the Prevention of Cruelty to Animals
Former Director, Ueno Zoological Gardens

私は、動物園という職場で約40年という歳月を動物たちと過ごしてきました。動物園の特徴は、種類が限られず、メダカからゴリラまで多種類の動物を比較しながら見られるということです。動物たちの本当の姿を見るためには、これはとても重要なことです。現在、この地球上に生活している動物たちは生命の絆で深く関わりをもって生きており、その進化の過程で横のつながりをもってそれぞれのカタチと生活のスタイルを獲得して今日に至っているからです。哺乳動物の一種である人間も例外ではありません。人間を知るには今の人間だけを対象にしていたのでは、その生理も生態もごく一面をみて判断することになってしまう危険があります。野生環境のなかで生きる動物たちの生態研究からは、人間生態の原点を知ることができますし、動物園動物の研究からは、人工環境下で生きる動物たちの適応の限界を知ることができます。後者に関しては、ロンドン動物園の哺乳類部長の経験を持つイギリスの作家・デズモンド・モリスは、「人間動物園」という本を書き、「人間は自らの意思で都市という動物園に入った特殊な動物であり、動物園動物を研究することで、その実像を知ることができる」といっているほどです。

今回は、動物たちの多様な生態の中から繁殖育児に関するものを取り上げ、現代人間の育児と比較検討しながら、その本質を探ってみたいと存じます。

*財団法人日本動物愛護協会理事長，元上野動物園長

育児の二面性：サルは生まれただけではサルになれない！

動物たちの育児に関わって観察していると、動物の仔が産まれ成長していくには、個体としての「生物的存在」と、他個体との相互関係の中で育つ「社会的存在」の二面性があることに気づきます。動物たちは、生れ落ちたその瞬間から種類特有の形態と生理を持っていますが、社会生活を営むためには、その「種類」に特有な他個体との「関係学」を習得する必要があります。動物たちは何千万年という長い進化の歴史の中で種類としての形態を獲得していますが、他の個体との交流の方法、群れ社会の中で守らなければならない種類としてのルールなど社会的行動もまた長い進化の過程を経て定着したのだからです。これは高度な群れ生活をする哺乳動物に顕著ですが、特に類人猿やサルなどでは実に明かです。彼らの子育てを見てみると、動物の子供たちは生まれただけでは「種」として完成せず、社会的行動ができるようになって（社会化 Socialization）初めて「種」になるのだということが実感させられます。

私が、このことを現実に実感したのは、動物園で生まれた動物の子供どもたちの子育てに獣医や飼育係が関与したことが、大きなマイナス面として現れたときです。母動物の産後の体調が良くない時や子供どもに異状があるときなど、人工保育といってミルクで育てるのですが、一見うまく育っているように見えますのに、結果として躓いてしまうのです。

最近、動物飼育の世界でも動物用ミルクが種類ごとに適切なものが開発され、犬猫用は当然ですが、サル用、ライオン用、アザラシ用、パンダ用まで揃っているという状況です。また、保育器や哺乳器具の開発も人間並みに進んでいます。栄養学的に計算されつくした人工ミルクと保育器具の発達は急速で、実際に死亡率が大幅に下がりましたし、成長曲線も母乳育児よりも上昇が急ですべてがうまくいったと思われました。ところが離乳期が終わって、群れの中に戻そうとしたときにトラブルが起きました。

外見上はだれがみても立派な仔サルですが、サルの群れの中に入れてやろうとしますと半狂乱になって泣き叫び、ただひたすらに飼育係の方に立ち戻ろうとします。この様子に群れのサルたちも遠巻きにするだけで近寄るものはいません。仔サルは自分をサルの仲間とは認識せず、飼育係を飼い主というよりも保護者として認識しているのです。これを矯正するため、飼育係の関与の度を思い切って少なくした

り、1頭でなく複数同居飼育をしてみたり、種々の方法を試してみましたが、結果は同じでした。しかも、これらの動物は、健康優良児で非の打ち所がないように見えたのですが、4歳の性成熟を迎える段階になっても他のサルとの交渉は殆ど見られず、それどころか、性的に成熟しているのに異性へのアプローチの仕方が分からず、性欲はあるのに、ペアを組むことができないのでした。性的成熟があれば野生動物の性交渉は本能的に行われるものと予想していた飼育係にとってもこれは意外でした。しかも、性的高まりを性行動で成就させる方法を知らない彼らは、逆に相手の異性に噛み付くという予想外のやり方で発散したのです。これによって回復不可能の怪我を負ったものも少なくありません。

勿論、稀にですが交尾に成功した例も皆無ではありませんし、この結果、妊娠を果たし、分娩に至った例もあります。また、自然交配を期待できない個体を人工授精の技術を応用して受胎させる方法も行われています。これならば交尾適齢のメスを麻酔し、採取しておいた精液を注入することで危険なく妊娠まで持っていけるからです。しかし、これらの結果も予想外の悲劇をもたらすことが決して少なくないことが分かってきました。

こうして、妊娠したメスザルたちは、やがて出産の時を迎えるのですが、この場合も予想外のことが起こりました。母ザルは自分の体から生まれ出てきた赤ちゃんザルを子どもとして認識できないらしく、母親を求めて泣き叫ぶ仔ザルをみて恐怖の叫び声をあげるのです。時には、慕いよる仔ザルを振り回し、壁に投げつけるものさえ出てきたのです。実は、多摩動物公園のチンパンジーでも同じ経験をしたことがあります。このチンパンジーのメスは幼くして研究者によって自宅に引き取られ、性成熟まで育てられてから動物公園に寄贈されたものでした。このチンパンジーは2回にわたって妊娠したのですが、2例とも出産時に子どもを壁に投げつけ、頭蓋骨骨折によって死亡という悲劇を起こしています。

また、京都大学付属の霊長類研究所では、同じような経歴を持つチンパンジーが、自らの産んだ赤ちゃんを見て狼狽し泣きながら逃げ回ったという例が記録されています。これ等の例は、いずれも子どもの成長は生物的な面と社会的な面との両面性があり、体は育っても心（社会性）が育たない限り、特有の行動を伴った種類として成立しないのだということを痛烈に物語っています。

これ等の結論が語るものは、母性愛とか父性愛とかいわれるものは、従来考えられたように「本能」などというものではなく、子を産み育てるというその種類ごとの子

育てのプロセスの中から生じるものであることが分かります。

社会性の源とは何か

母性愛や父性愛が本能でないとしたら、それはどこから生じ、どのようにして育っていくのでしょうか。動物たちは、その子どもを育てることによって人間のような社会的な利益を得ることは全く考えられないのに、死を賭して子どものために尽くすのは何故なのでしょう。この答えは、先ほどから述べてきた人工飼育の動物たちが子どもを育てないどころか、子どもを傷害するという裏返しの事例との間に潜んでいます。

即ち、動物たちの自己犠牲的な子どもへの「愛」は、長い、長いその動物の行動進化のプロセスの間に、生理と分かちがたく結びついて発現するように仕組まれてきたのです。例えば「母性愛ホルモン」とも呼ばれるオキシトシンというホルモンは、出産と同時に大量に分泌されることが分かっていますし、出産後は子供どもの哺乳刺激がこの分泌を促し、子供どもの視線や泣き声、むずかり声までもが母性愛ホルモンの分泌を促し続けるのです。

また、「抱擁は第二の子宮」という言葉がありますように、母親による子どもの抱擁は子宮の中で子どもたちが味わってきた比類のない安心感を再現してくれるのです。サルたちを見ていると、生まれた子どもは産み落とされることすらなく、股の間から伸ばした母ザルの両手で掬い上げられ、そのまま、胸の部分に引っ付くようにしがみつ き、数ヶ月を過ごすのです。母親が立ちひぎになって、両手を仔ザルのうでで組みますと、そこはもう子どもにとっては別世界、子宮内と同じような安心の世界が作り出されるのです。そのうえ、首を左右に回しさえすれば、そこには乳首が用意されていて好きな時間に好きな量だけ飲むことが可能なのです。サルの乳の成分は人間の乳成分に近いのですが、死亡・蛋白など肉食動物に比べると低くなっていますが、その分だけ頻繁に飲む必要が生じ、それだけ母性愛ホルモンの分泌が促されるという結果を生みます。

私は、この状況を「サルの母親の抱擁は第二の子宮である」と表現しています。

この「抱く、抱かれる」という関係は、ホルモン生理と緊密に結びついていると申し上げましたが、このことは結果として、親子の精神的、心理的な関係に大きな影響を与えることが分かっています。エリクソンErikson E. H. は、この関係を「原信頼」

と呼びましたが、まさにその通りで、最も信頼できるものの存在があつてはじめて他への関心が生まれ、社会化への窓が開かれるのだらうと思います。事実、ニホンザルなどを見ていると、5ヶ月近くも抱かれていた仔ザルが両足を地面につけて歩き始めるまでには、何回も何回も母ザルが下に下ろす動作を繰り返しますし、30センチの母子間距離をとるのに数日かけることもあります。原信頼があり、母親の決してあせらない対応があつて、仔ザルは緩やかに母ザルを離れ、同様の状況に或る他の仔ザルや年上の子ともザルと交流を持つようになるのです。

子守り行動

都立多摩動物公園では、20数頭のチンパンジーを群れで飼育しています。毎年何頭の赤ちゃんが生まれますが、この赤ちゃんを巡って興味ある現象が起こります。それは、3～4歳になる子どもチンパンジーたちが、赤ちゃんの母親から生後間もないチンパンジーを借りるという特異的な行動です。何のために借りるか、飼育係も最初は心配だったようですが、やがて、それが「子守り」をするためであることが分かつて安心して観察したそうです。

しかし、何の血縁があるわけでもない子どもたちが競って「子守り」とするのは何のためか、不思議です。見ていると、子守り希望の子どもチンパンジーたちは、子持ちの母親の前に座り、両手を差し出す姿勢で、何回もお辞儀しながら、赤ん坊をせがむのです。勿論、赤ちゃんは母親の許可なしに触れたりすることはできないルールになっており、違反すれば母親からは勿論、群れのリーダーからもひどいお仕置きが科せられるのです。なぜ、これほどまでに子守り行動に熱心なのでしょう。

多摩動物公園の調査によりますと、子どもザルの間に頻繁に「子守り」をしたサルは、成長して自分の子どもを育てるときに有利に働き、育児成功率が高いという結果がでています。

社会化を促す親子関係

社会化を促す親子関係は、サル以外でも勿論見ることができます。ここではライオンの例を見てみることにします。ライオンのような強力な武器を持つ動物では、その攻撃力を仲間には向けないようにすることが必要ですし、そのためのノウハウを学ば

せる過程が必要です。このプロセスもまた、子育ての中にさりげなく潜ませていることがわかります。子供ライオンが哺乳をするとき、離乳期に近くなりますと泌乳量が少なくなってくるので、子どもは両前足を使って乳房を揉みながら飲むようになります。このとき、こどもライオンの爪が出た状態になっていますと、その鋭い爪先が充血した乳房に食い込みますので、強烈な痛みと、時には出血することさえまれではありません。この状態になったとき、母ライオンは思いがけないほどの力で、仔ライオンを蹴飛ばし、2メートルも飛ばされることさえあります。このようなことを繰り返しながら、仔ライオンは、自らの武器である爪を自分でコントロールし、必要なとき意外は鞘に収める術を学んでいくのです。同じように強力な武器である牙も同様にコントロールする術を哺乳という生存に不可欠の行動の中で学んでいくのです。仔ライオンの牙も幼児期は細く鋭く、乳首をくわえて哺乳するとき、それが張り切った乳首に触れると強烈な痛みを母親に与えます。このとき、母ライオンは、すぐに反応し仔ライオンの首筋を強く噛み、場合によっては振り回すことさえあります。このような過程の中で、仔ライオンは自分の牙が母ライオンを傷つけ苦しめることに気づき、哺乳は乳首を噛むのではなく、舌に巻いて吸うことで吸乳出きることを知り、牙をコントロールする術を身につけるのです。こうして、自分の武器を制御することは仲間内で生活をするとき、本当に噛まない「なま噛み」、本当に爪を立てない「グルーミング」のテクニックaggression controlを体得し、子ども仲間との正常な付き合いを通り抜けて、群れに入る「社会化」を完成することができるのです。このプロセスを経ない限り、動物たちは群れに入ることができず、群れのルールを学ぶこともできません。

社会化の三段階

動物のこどもたちが群れに入り、群れの中で生活し、次代の子孫を残すという段階にいたる初期過程を、デズモンド・モリスは子供たちの叫びとして、次のように表現しています。即ち、

第一段階　しっかり抱いて！Hold me tight！

第二段階　下に降ろして！Take me down!

第三段階　ひとりにして！Leave me alone!

そして、このプロセスは、決して省略したり、スキップしたりすることはできないというのです。そして私もモリスの説に賛成です。いま、私は動物園時代の数々の失

敗例が第一段階を軽視したり，スキップしたりしてきたことにあったことを，改めて悔いています。そして，私たち人間の子育てもまた，その轍を踏みつつあるように思われてなりません。